

「私たちクラブ員を含めた若い世代だけでなく大人にも新規就農者を増やしていくために私達クラブ員はどのような活動ができるか。」

クラブ員代表者会議 関東ブロック連盟 神奈川県立中央農業高等学校

畜産科学科 3年 足立 真美子

畜産科学科 3年 鬼頭 実佑

畜産科学科 3年 加藤 綾乃

1. はじめに

(1) 神奈川県農業

神奈川県では、生産地と消費者の距離が非常に近いことから、都市の中に農業がある都市農業がおこなわれており、地域ごとに異なる様々な農林水産業が営まれています。

地区ごとに分けると5つの農業形態があり、横浜・川崎地区では、果樹や野菜だけでなく、畜産物も生産されており、さらにはみそやワインが生産されたりと、多様な農畜産物が生産されています。次に県央地区では、果樹や大豆、本校が位置する海老名市ではスイートピーなども生産されています。また、県西地区は海、山、川の自然豊かな地域であり、果樹や茶、また最近では「湘南ゴールド」が新たな特産品として注目されています。次に湘南地区は、米の主産地で、きゅうりやなす、バラなどの施設園芸のほか、複数の種類の果樹が生産されています。最後に横須賀三浦地区では、全国的に見ても珍しい露地野菜の産地で、キャベツ・ダイコン・カボチャ・スイカなどが特産品として生産されています。

このように、さまざまな農業が盛んにおこなわれている神奈川県ですが、近年、都市化の進展に伴い、農家数が減少し、次世代の農業のあり方として第二種兼業農家と自給的農家の割合が多く占めています。

【神奈川の特産品】



(2) 関東ブロックについて

関東ブロック連盟は、茨城県9校、神奈川県5校、群馬県8校、埼玉県8校、静岡県11校、千葉県14校、東京都7校、栃木県7校、山梨県3校の1都8県72校からなるブロックです。神奈川県連盟は中央農業高校、相原高校、平塚農業高校、三浦初声高校、吉田

島高校の計 5 校で構成されています。

【関東ブロックの農業高校数】



(3) 中央農業高校について

私たちの中央農業高校は関東ブロックの中でも農業高校数の少ない神奈川県にあります。1906年に創立し、110年を超える歴史と伝統をもつ高校です。県内県立高校の中でも相原高校に次ぐ2番目に広い土地面積であり、温室や水田、畑、果樹園のほかにも、牛舎や豚舎、鶏舎、食品加工施設があり、とても充実した環境が整っています。

中央農業高校は、園芸科学科、畜産科学科、農業総合科の3科からなり、農業総合科はさらに栄養化学類型、食品製造類型、生産・販売類型、流通・経営類型の4つの類型に分かれます。

学力・農業専門性の向上、体験重視の教育、自立した学習者の育成、そしていのちを尊重する教育（いのちはぐくむ）を目標にしています。

(4) 本校での活動

私たちは、普段から近隣の支援学校や保育園の方、地域の方と交流し、農業の魅力や命の尊さを伝える活動をしています。これらの活動を通して、学校の教育目標の一つである「いのちはぐくむ」ことを体験して学び、さらには農業に興味を持ってもらうきっかけになればと思っています。この活動の一環で、近くの保育園と協力をし、本校の生徒と園児とともに野菜を育て、収穫し、調理したものを食べるという取組を授業の中で行っています。他にも、部活動を通して、小学生から中学生対象に食育活動を行ったり、実際に動物に触れあってもらっている活動をしています。

このように私たちは普段から農業について興味を持ってもらえるような活動をしていますが、活動の対象は高校生以下の年代を対象にしたものが多く、大人の方と交流する機会がありません。

そこで、私たちは、広大な土地で農畜産業が盛んにおこなわれている北海道に行けば、何か今後の活動に向けて活かせるものがあるのではないかと思います。夏休みを使い、北海道の農家さんに酪農体験をさせていただくことにしました。

酪農体験は、2泊3日で行いました。実際に体験し、学び、今後の活動について考えたことをご紹介します。

2. 北海道で学んだこと

(1) 北海道について神奈川県との比較

北海道の面積は約 83,450 k m²と広大で、地域によって気象や立地条件が異なることから道央地域では稲作を中心に、道東・道北地域では飼料作物、酪農、道南地域では野菜類、果樹を、道東地域（十勝、オホーツク）では豆類、麦類を中心とした農業を展開していました。どこの地域も土地が広いため大規模で機械化された畑作や酪農を行っていました。神奈川県と同様に地域によって生産されているものの違いはありますが、生産量の違い、機械化などの面では神奈川県より進んでいることがわかりました。

(2) 体験内容

北海道には、実際に農家さんで体験をさせていただくことで、農業についての課題を知ることと、北海道での農業形態を知るために行きました。

実際に農家さんで体験させていただいた内容について紹介します。

体験は、2軒の農家さんに分かれて行いました。

まず1軒目では、朝は5:30から搾乳、掃除を開始します。9:00頃に朝の作業を終え、夜は再び16:30頃に搾乳、掃除を開始し、20:00頃に作業を終えます。

もう1軒では、作業時間は変わりませんが、搾乳の作業が自動化されていたので、作業内容は、牛の誘導、掃除、給餌でした。

また私たちは、農作業体験だけではなく、昼間は北海道別海高校農業特別専攻科 酪農経営科の方々と交流させていただきました。交流をする中で、別海高校の農業特別専攻科では、働きながら学べる学習環境があること、様々な資格取得ができること、奥深い経営学習ができることを知りました。また、将来家の経営を継ぎたい人や、酪農家を目指す人が学びやすい環境であったと思います。

(3) 北海道別海高校 農業特別専攻科について

北海道別海高校の農業特別専攻科は、理論と実践力を兼備した酪農自営者を目指すことを目標にして創立した学科です。

講義は10:50から14:35までと、朝・夕の実習ができるよう設定されており、6月から9月の牧草期間中は登校せず、就労先や実習先での実習に専念できるような学習システムとなっています。実習先は、家が農家の人はそのまま自宅の牧場を選択することが多いですが、非農家の方には、先生方が親身になって実習先を紹介してくださるそうです。

入学については、非農家の方でも入学することができます。学費は、2年間で約18万円と、とても安く、就農に向けてのサポート体制が整っていると考えられます。また、これまでに入学した非農家の方が新規就農したことも多くあり、経営方法を深く学べる教育方法や、実習が多くあることが新規就農につながったことに深く関係していると言えます。

3. まとめ

実際に農家さんの下で農業体験をしたことによって、どれぐらいの体力が必要なのか、どのような点が大変なのかを身をもって実感することができました。また、北海道別海高

校の農業特別専攻科の制度を知り、新規就農が懸念されてしまう理由をつかむことができました。

まず、農業体験をしたことにより、朝は早く夜は遅いので拘束時間が長く、また1日を通して体力を使う仕事であると感じました。酪農に注目して考えると、動物に関心があり、体を動かす作業が好きである方には酪農家は最適であるかもしれません。しかし、ここ最近の社会では働き方改革として、労働時間の短縮やワークスタイルの改善など、働く人にとってより良い環境づくりがなされています。それに伴い、農家の労働負担が軽減するよう、労働人員を増やし、シフト制での働き方を検討してみてもどうかと考えました。

農業の目的として、おいしく安全で、栄養のあるものを消費者に適切な金額で提供することがあります。このような目的を持ち農業を行うには、正しい知識と技術を持つことが必須となります。

別海高校の農業特別専攻科では、経営方法を深く学び、新規就農を目指せる学習ができるというところから、一般の方が新規就農をしにくい理由には、経営方法がわからないということもあるのではないかと考えました。一般教養の中でも、経営についての知識向上を図るため、経営に関する科目を授業に取り入れてはどうかと考えました。

【これからの活動方針】

農家さんと高校生で一緒に農業体験を開催する



大人から子供までたくさんの人々との交流が増える



地域の活性化にもつながり

農業高校や農業、食に興味ができる

4. 結果

この体験や交流を通して新規就農者を増やすためにはどうすればいいのか考えた結果、まず農業について知ってもらうこと、興味を示してもらうことが大事だと思いました。そのためにはすでに学校や学校外で行っている小・中学生との交流会に農クとして参加し、普段の活動や農業高校のことを広めることにより次世代の人たちの将来に「農業」という道もあることを教え、少しでも農業に興味を持ち、農業をやりたいと思っていただくことが必要であると考えました。しかし、交流会や講座だけでは農業の楽しさを伝えられないと思い、実際に大人の方々も参加できるような農作業体験をするのがいいと考えました。例えば地元の農家さんと私たちがコラボし、収穫作業や、畜産なら家畜とのふれあいや搾乳作業、掃除など本格的な作業を一日中私たち高校生と一緒にを行うことにより地元の方々との交流も増え、地域の活性化、そして農業高校のことを知っていただくことにも繋がり、農業に興味を持っていただくことができると思います。また、農業を本業ではなく副業として始めることで、気軽に働けることをきっかけとして、食や農業・地方に興味をもってもらえるのではないかと考えました。

よって私たちがこのテーマについてできる活動は、年代が低い方を対象とした体験活動だけでなく、大人の方も対象にした活動を行っていくことだと思えます。